

文窓

ふみのまど

神戸大学文学部同窓会 文窓会
 会長:池上 淑子
 事務局:〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
 TEL(078)881-1212(代) FAX(078)803-5529
<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/>(文窓会)
<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/>(神戸大学文学部)

10号
 2012.9.30

振り返れば六甲の山並み~あの頃の友に会いたい

第7回 神戸大学&文学部ホームカミングデイ2012

— Kobe University Homecoming Day 2012 —

10/27(土)

神戸大学ホームカミングデイ2012

出光佐三記念六甲台講堂
 午前中:NHK住田功一アナの司会で記念式典。

※詳しくは 下記のホームページをご覧ください。
 第7回 神戸大学 ホームカミングデイ
<http://www.kobe-u.ac.jp/hcd/2012/>



文学部でのホームカミングデイは、午後から!! 誘い合わせて、お気軽にお越しください!

文学部ホームカミングデイ2012

13:00~13:30	受付 文学部 B棟132教室	<併設企画> 12:50~16:30 (文学部 B棟132教室前)
13:30~13:40	文学部長挨拶	
13:40~14:10	学生による研究報告 「無意識的な物体認識についての研究」 鈴木恵美(心理学専修・M2)	・地域連携センター ・海港都市研究センター ・倫理創成プロジェクト ・日本語日本文化教育インスティテュート ・古典力・対話カプロジェクトによる展示
14:10~15:20	講演 「平清盛と日本文化」 樋口大祐准教授(国文学専修)	
15:30~16:00	第6回文窓賞 授賞式 (学生レポートコンクール)入賞者授賞式	■お問い合わせ先 人文学研究科総務係 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 Tel: 078-803-5591
16:00~16:20	文窓会総会	文窓会(文学部同窓会)ホームページ http://www.kobe-u.biz/bunsokai/
16:30~18:00	懇親会 瀧川記念学術交流会館 (参加費: 3,000円/当日)	

第6回文窓賞(学生レポートコンクール)入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。

(昨年の文学部ホームカミングデイの様子です。)

昨年の10月29日(土)午後1時30分より開催されたホームカミングデイでは、学生による留学や研究の報告、第5回文窓賞授賞式などでキャンパス気分を満喫。4時20分から瀧川記念学術交流会館に移っての懇親会では、世代を超えた交流をお楽しみいただきました。今年もふるってご参加を!



今年もぜひ誘い合わせてご参加ください!!

■文窓会HPフォトギャラリーで当日の様子をお楽しみいただけます。

文窓会ホームページを開き、<イベント報告>→<ホームカミングデイ>→
 <第6回ホームカミングデイ【フォトギャラリー】文学部編>へと進んでください。
 文窓会主催・卒業記念ウェルカムパーティ(3月23日)もフォトギャラリーでご覧ください。



特集/「阪神」の経験から東北支援 復興住宅や障がい者施設と交流

第6回文窓賞 学生レポートコンクール結果速報
 同窓生の近況●汗と泥と罵声と清盛等の埋蔵文化財
 10月27日(土)は六甲台へ! 文学部ホームカミングデイ2012





ごあいさつと オックスフォード大生 受け入れについて

人文学研究科長・文学部長
文窓会名誉会長 藤井 勝

この度、人文学研究科長・文学部長を務めることになりました。専門は社会学、とくに経験社会学です。神戸大学文学部から大学院へと進み、助手もさせていただいた後に他大学で数年間教員生活を送り、縁があり神戸大学文学部の教員となり、現在に至っています。

この歳になり自身を振り返ると、若い頃に巡り会い、お世話になった先生方の存在の大きさにあらためて気づかされます。学生時代が長かったこともあるでしょうが、先生方の影響のもとに私の教育研究、そして思考や生活スタイルまでもが成り立っているようです。自分のものだと勝手に理解していることも、その種は先生方によって蒔かれています。最近、そのようにして私自身が活かされていることを嬉しく感じています。文学部やその大学院というのは、各ディシプリンの教育研究を通じて「人を創る」場ではないでしょうか。私を教育・指導してくださった先生方がそのことを実践されていたことに尊敬の念をもちつつ、学生としての私はそれに十分応えていないことを

反省しています。

さて、神戸大学文学部は本年(2012年)10月より、オックスフォード大学東洋学部日文学専攻の2年生を中心とする12名(本学部同一年次学生の約1割に相当)を1年間受け入れるというプログラムを開始しました。1年後にはこの学生たちは帰国しますが、ほぼ同数の新2年生が新たに来神します。このことが毎年度繰り返され、年間を通じて15名弱のオックスフォード大生が本学部で学ぶというシステムが長期にわたって構築されます。

あらためて申すまでもなく、オックスフォード大学は世界に冠たる大学ですので、本学部に留学してくる学生の多くも将来、ヨーロッパそして世界をリードする人材になることでしょう。こうした学生の育成に対して、本学部が重要な役割を果たすこととなります。60年以上にわたる本学部の歴史のなかでも本当にエポック・メイキングであるとともに、私たちの力量が試されることとなります。

そして、これらオックスフォード大生は、学舎(まなびや)を共にする(あるいは、した)という意味で「神戸大学文学部同窓生」、つまり「文窓会」の後輩や仲間にならねません。同窓会の皆様に対しては、このプログラム、そしてこれら学生たちに温かいご支援やご協力をいただかずよう、衷心よりお願い申し上げます。



オックスフォード大学から 留学生達がやってくる!

文窓会会長 16回生
池上 淑子

「文窓会」会員の皆様には、お元気でご活躍のことと存じます。

日頃は「文窓会」に何かとご協力賜りまして有難うございます。「文窓会」が神戸大学文学部同窓生としての「絆」をより強める一助となりますことを心から願っております。

さて、この夏、日本中を、いや世界中を熱狂させたロンドンオリンピック、その開催国英国からオックスフォード大の留学生12名がこの10月に文学部にやってきます。ご承知のように英国と日本は、ともに地形的には海洋国家であり、「万系一世」の歴史を持ち、政治的には「君臨すれども統治せず」の国王・天皇を抱く国家であって、第二次大戦で日本が敗戦国となるまでは共に侵略されたことがない「国」でもありました。オックスフォードの留学生達も必ずや親近感を覚えているに違いありません。

知識形成は15世紀後半の印刷技術発明によって「本」が大きな役割を果たしてきましたが、ここ10年来のイン

ターネットの進化は「IT革命」とよばれ、「印刷革命」以上に知的生産手段を大きく覆すこととなりました。私達は情報のグローバル化によって溢れるばかりの情報の中に入ります。現在、その中から本当に役に立つ情報を得てさらに知識として生かすにはどうすればよいのかが問われています。

この時代に異なる二つの文化を持つ学生達が直接"向き合って"話し合う機会に恵まれたことは素晴らしいことです。お互いの国家や文化に関する知識と理解を深めることで、複眼的な視点を養い人間的成長を図る機会にもなることでしょう。オックスフォードの留学生達や母校文学部の学生達にとって充実した体験となりますことを心から願っております。

ところで、「文窓会」は同窓会名簿の発行を、19年度版を最後として今後の発行を見合わせることに致しました。昨今の個人情報保護条令の見地からどの学部も既に同窓会名簿の発行を中止しており、「文窓会」会員の皆様にもご理解いただければと存じます。新たに「文窓会」事務局を近々開設して「文窓会」活動の一層の充実を図るべく努力して参りますので、皆様にはますますのご指導、ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第6回 文窓賞

学生レポートコンクール 結果発表

神戸大学文学部で学ぶ学生たちのさまざまな生き様・挑戦・ビジョンにエールを贈る「文窓賞」レポートコンクールに、今年は9名の応募がありました。9月5日に藤井文学部長、長野副学部長、奥村副学部長の3名の先生方と文窓会役員による選考会が開かれ、白熱した討議の結果、下記の作品が受賞作に選ばれました。

■ 最優秀賞 (表彰状と賞金10万円) 該当者なし

■ 優秀賞 (賞金3万円)

「介護体験で学んだこと、そして夢へと生かす」 齊賀 万智

「東日本大震災と私の立ち位置」 酒井 友樹

「5年目の挑戦」 酒井 愛美

■ 佳作 (図書券5,000円分)

「マーシャル諸島で見つけたもの」 隅野友加里

*優秀作の表彰は10月27日の第7回文学部ホームカミングデイにて行います。
*入賞者の受賞レポートは冊子にして同日の文窓会総会時に配布いたします。

◎選考基準: 元気で個性的な学生生活の獨創性や発展性に対する評価と、その活動や体験が社会をどれだけ納得させる力があるかによって選考。

◎選考委員: 藤井 勝学部長(社会学教授)
長野順子副学部長(芸術学教授)
奥村 弘副学部長(日本史学教授)
池上 淑子 鞍井 修一 日高 健一 花木 直彦 廣野 幸夫 西川 京子
武藤 美也子 吉田 浩次 宮崎 典久 田中賢司 坂本 直樹 田中 睦子

選考を終えて

「選考を終えて」

9編の応募作の内容は、部活動、海外留学、就職活動、実習体験、ボランティア等バラエティに富んだもので、全体的に出来は昨年より良かった。ただ最優秀賞に匹敵するだけの、新しい世界を文章として表現する作品はなかった。応募学生達は、一様に対象へのアプローチが素直で表層的で、現代の良い子の若者がそのまま文章化されている感じがした。昨年日本の将来を大きく変える東日本大震災が起こったにも拘わらず、それに関する応募がないと指摘すると、すぐに震災援助ボランティアに参加し、自分の立ち位置を探ろうとし、レポートとして提出してくれた。これは文窓賞が学生に影響を与えられたと言うことで、当方としては大変嬉しいことである。ただそこに若者の特権でもある批判的精神の目で見えた現代社会の問題点や、君たちが担っていかなければならないこれからの日本に対するビジョンが書き込まれていないことが残念である。これは他の作品についても同様である。選考基準に「…社会をどれだけ納得させる力があるかによって選考」とある。来年こそ最優秀賞を獲得するレポートを期待する。(武藤記)

「阪神」の経験から東北支援 復興住宅や障がい者施設と交流

文窓会会員の山口さんは、現在 NPO 法人「ひょうご・まち・暮らし研究所」を設立して、東日本大震災の被災地で、生活者目線での復興活動に取り組んでおられます。その取り組みの詳細をご寄稿いただきました。

山口 一史（ひょうご・まち・暮らし研究所）（12 回生 昭和 39 年卒業 哲学科 芸術学専攻）

東日本大震災の発災から 1 年半になろうとしている。多くの犠牲を生み、いまなお復興の方向が見えてこない大災害である。筆者のグループは微力ではあるが NPO として東北の支援を続けている。17 年前の阪神・淡路大震災の経験とその後のさまざまな調査から得られた生きるための何かを伝えたいと思うからだ。

（東日本大震災の被災地の様子はおおむね本稿執筆時の 2012 年 8 月 25 日ごろのデータに基づいている）

1 はじめに

仮設住宅の集会所はちょっとしたことで空気ががらりと明るくなる。

ある日、宮城県石巻市にある大きな仮設住宅団地の集会所を訪れた。地元で活動している NPO と一緒だったが、たまたま北海道からボランティアに来たという男子学生がついてきた。集会所で中高年の女性たちが円陣を組むような形で長机を並べ、その真ん中に男子学生がなぜか入ってしまった。

「お兄ちゃん、あんた、目がいいやろ。針に糸通して」と早速注文が飛ぶ。「目はいいです、見えます。でも糸を通すってどういうこと」と困ったような声を出す。一座がどっと笑う。男子学生は針を持ったのは今日が初めてかもしれないし、糸も同じだろう。

全体の雰囲気がとてもよくなり、その男子学生はあっちからもこっちからも声がかかって大忙しだった。

2 広大な被災地

東日本大震災の被災エリアはとてつもなく広い。

警察庁の調べによると、この地震または大津波によって何らかの被害を受けた自治体は 22 都道県に及んでいる。このうち死者が出たのは 12 都道県だ。

何よりも被害の特徴は大津波の広範な襲来である。青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉の 6 県の津波による浸水面積は合計 561 平方 km にも達している。561 平方 km という広さを実感するために比較となる物差しを探そう。関西地区の人なら神戸市の東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨区、垂水区



ビルの屋上に乗用車が。津波がこより高きことが分かる(宮城県女川町)

の瀬戸内海に面した 7 つの区の総面積がおよそ 173 平方 km だ。この神戸市の中心街でいわゆる六甲山の南側全域が浸水したとして、その総面積のおよそ 3 倍もの大きさに匹敵する。関東の地理に明るい人なら JR 山手線の内側の面積がおよそ 63 平方キロメートルと言われているので、浸水面積は何と 9 倍にもなる。それだけの広い地域が津波に漬かり、人命や家財を根こそぎ奪われてしまったのだ。

私たち神戸で暮らしているものにとってどうしても、1995 年の阪神・淡路大震災の被災状況と比べてしまう。下表は両者を比較したものだ。

表 東日本大震災と阪神大震災の比較

	東日本大震災	阪神・淡路大震災	
発生	2011 年 3 月 11 日 午後 2 時 46 分	1995 年 1 月 17 日 午前 5 時 46 分	
規模	マグニチュード 9.0	マグニチュード 7.3	
震源	三陸沖 (北緯 38 度 06.2 分、 東経 142 度 51.6 分) 深さ 24km	淡路島 (北緯 34 度 36 分、 東経 135 度 02 分) 深さ 16 km	
人的被害	死者	15,869 人	6,434 人
	行方不明者	2,847 人	3 人
	重傷	6,109 人	10,683 人
	軽傷		33,109 人
住家被害	全壊	129,340 戸	104,906 棟 186,175 世帯
	半壊	264,043 戸	144,274 棟 274,182 世帯
	一部損壊	726,094 戸	390,506 棟
	全焼・半焼	279 戸	
合計	1,119,756 戸	639,686 棟	

東日本のデータは 12 年 8 月 29 日現在、警察庁調べ

すでに被災者自身によって経験をたどった記録集などが発行されている。そのうちのいくつかを目を通すと、どの文章も大津波の恐ろしさや激しさ、そこから逃れられた経緯などが綴られている。流されている家屋の屋根にしがみつき、行きつ戻りつする中でより安全そうな家屋や船に乗り移りながら命を取り留めた情景などは何度読んでも、その筆者の恐怖心の深さを感じてしまう。

助かった人から直接聞かせてもらったこともある。その夜、電気がなくあたり一面は真っ暗闇で何も見えない。そこへ何度も何度も押し寄せる津波によって流された家財や自動車などがぶつかり合う激しい音に混ざって救助を求める人の声が聞こえる。聞こえても果たしてどこから聞こえてくるのか全く見えず、こちらも大声をあげて反応をうかがうが手がかりがつかめない。絶望感にさいなまれながら一睡もできなかったという。

つらかっただろうなと心から思う。

3 私たちの活動

私たちのひょうご・まち・暮らし研究所は他の団体と協働して東日本大震災の被災地に①仮設住宅の集会所などでみんなが楽しめる手芸品のキットを送る②被災地にある障がい者の福祉施設（作業所や授産施設）に新商品の企画を届ける一ことに取り組んでいる。

先にも述べたように東北は広すぎてとても全部をカバーできないだろうということで、まずは宮城県内の被災地から取り組みだしている。仮設住宅支援では石巻市、七ヶ浜町、山元町を中心に気仙沼市、岩手県では陸前高田市、釜石市、宮古市などに手芸キットを送っている。

これは仮設住宅で閉じこもりがちになる中高年の人が集会所に出てきて、みんなで一緒に楽しめるように手芸キットを用意している。

実はこれは、阪神大震災の時に西宮市で設立された



手芸キットを使うとこんなしじみ貝の根付(左)と「かえる」ができあがる

女性グループ「木馬の会」が作っていたしじみ貝の根付やプラスチックペレットを入れたカエルのミニぬいぐるみの「再出動」だった。木馬の会にお願いして、これらの材料をそろえ、作り方を書いた手引書とセットで袋詰めをしてもらっている。

とはいってもキットだけ送ろうにもまず適切な送り先が分からない。そこで被災地を訪ねて日常的に活動している NPO や地域のボランティアグループ、地元社会福祉協議会の支援員らに説明し相互の理解のもとに、それらの団体に送り、これと思われるタイミングで使ってもらうことにしている。また釜石市や宮古市などはそれぞれの都市を活動現場としている NPO にことづけて、集会所のスケジュールなどをらみながら活用してもらっている。

もうひとつの作業所支援は、障がい者の施設も大震災で利用者や指導員が亡くなったり建物が流されたり大きな被災を受けている。あるいは下請け仕事も激減するなど苦境に立っている。そこで兵庫県側でデザイナーら専門家による商品開発の研究会を設けて商品を企画。それをまず兵庫県の作業所で実際にできるかどうかを試作し、作り方の改良などを検討したうえで仙台市、登米市、角田市の授産施設に設計図、材料、工賃などを届けて生産を続けている。

4 阪神大震災の記憶

この仮設住宅支援は 17 年前の阪神大震災がきっかけとなっている。大きな災害に見舞われくらしが傷ついたとしても、それを再建する公的な手だてがほとんどない。確かに仮設住宅や復興公営住宅の建設、入居という道はあったが、くらしを支える視点からの「仕事」の開発や提供は皆無に等しかった。

大震災で仕事を失ったり勤め先も被災して雇用を打ち切られたり、内職仕事やパートの仕事がなくなったりしたケースは非常に多い。

当研究所が研究者とともに時間をかけて当時のボランティア活動や災害ボランティアと呼ばれたグループの活動実績などを調査し、当時のデータや帳簿などを点検しているうちにひとつの「発見」をしたのだ。

それは震災から 1 年半ぐらいい経過したころ、いくつかのグループで手芸品などを作って販売し、作り手はその仕事量に応じて「工賃」を得る仕組みが生まれていたのだ。西宮市の木馬の会、神戸市のプロジェクトワン・ツー（手芸品）、阪神・淡路大震災『仮設』支援 NGO 連絡会（現被災地 NGO 協働センター、タオルを加工したまけないぞう）、ゆいまーる神戸（弁当の配達）、コミュニティ・サポートセンター神戸が指導した布ネット春（服装のリフォーム）、リフォー

ムネットてん（大工仕事や車いすの修理など）、車ネット小旅（送迎サービス）、あたふたクッキング（弁当の配達）といったグループがそうだ。

工賃の額はばらばらだったが、多い月で1人当たり2万円から3万5千円ぐらいになっていた。パートタイマーや内職がなくなった代わりとしてこの金額の収入は意味があり、当時取材した仕事にかかわった女性は口をそろえて「ありがたかった」と語っていた。

その後の調査で中越地震の被災地でも同じような被災者グループによる小さな経済活動が生まれていることも分かった。筆者らはこうした動きを「復興コミュニティビジネス」と名付けた。

この復興コミュニティビジネスには収入として得られる金額の部分と、もう一点、「商品」を作り出して販売する、当然品質には責任も感じる、仲間と共同作業として生産にあたる一などのことから、災害によって切れてしまった社会とのつながりをわずかずつでも復旧していく重要な意味合いがあったようだ。



仮設住宅の集客室で開かれた手芸教室(2011年10月、宮城県石巻市で)

5 災害ボランティアが示した“カ”

少し95年当時のことを紹介してみる。

このころ筆者は神戸でメディアに勤務していて、被災地にかかわる研究者らによる復興ビジョンを描くプロジェクトに関係していた。そんなこともあって毎日のように被災地を歩き回り、どこで何が起きたのかをしっかりと見届けようとしていた。

まちなかで毎日、若い集団とすれ違っていた。男も女も目は前方をしっかりと見つめ口元をきつと引き締めて、大きなリュックを背負い、銀色のアルミマットを筒状に丸めたものを結わえ付けていた。全国から駆け付けてくれたボランティアの一団だ。

3人4人、場合によっては20人ぐらいの大部隊もいた。みんな黙々と目的地に向かい素晴らしい働きをしてくれたのだ。

発災から時間がたつとともに、被災地を回ってい

るとそうした若者と出会うことも増えてきた。注意して見ていると短期間で別のグループと交代していく人もあるが、ずっと被災地にとどまっている人もいた。公園のテントやプレハブ小屋で寝起きをしている。食事もつましく、第一どうして自分の生活を維持しているのかもわからない。もちろん誰も給与や報酬を払っているわけではない。

しかし親身になって避難所のお年寄りの身の上を案じたり、のちに仮設住宅に移った後も安否確認という形で巡回していた。

金もなく、報酬もなく、つましい環境でくらしているのに、なぜかみんな明るい。

災害ボランティアと呼ばれていた彼らと話していると楽しいえ、力が与えられるような気がする。不思議だ。

不思議が高じて、自分の役割が終わればこちらの「世界」に加わりたいと思うようになり、そのうち早く加わりたい、早く仕事を終わりたいと考えるようになった。

6 NPO の設立

2003年6月末に仕事に区切りが付けられたので、早速、友人の間を回ってNPOの設立準備にかかった。幸いにもジャーナリスト、建築家、研究者、公務員、福祉現場の職員らが企画に賛同してくれ、設立に必要な人数がそろい同年9月に現在の研究所の設立にこぎつけた。ただちに特定非営利活動法人の認証申請を行い、翌04年1月に兵庫県から認証を得た。

当研究所の設立目標をこんなふうにした。

社会が多様化し、高度化してくると、それぞれが狭い世界に閉じこもりたり独自の言葉や価値観を信奉するようになったり、市民活動の展開にとって妨げとなる心配がある。市民活動が広がっていくために、市民と行政、あるいは市民と専門家の間の“通訳機能”を果たそうと一。

7 研究所がめざしているもの

当研究所は大きく分けて日常的に3つの分野の動きを続けてきた。

第1は先にも触れたが、大きな災害が起こった後、暮らしを立て直し復興していく手だての調査と、その手だてが生まれやすくするための条件の提案だ。

こうした中で比較的高齢の女性らが集まって手芸品を作ったりしながら仲間づくりと仕事づくりを同時に進捗させる手法に着目し、その事例調査を息長く続けている。

第2は障がい者の作業所、授産施設のものづくり

相談だ。社会の成長や発展から取り残されたような作業所、授産施設の経営改善のために売れる商品づくりやデザインの開発について相談にのりながら、施設間のネットワークづくりなどの実現にも力を入れたと考えている。

第3は調査研究。社会調査を得意とするメンバーがそろっていて、これまでも様々な新機軸を提案し実践してきた。

このようなテーマを抱えて活動してきたわけなので、東日本大震災が起こり、大きな被害の状況が分かってくるに従って、これまでの経験と実践で得たものを東日本でも発揮しようとごく自然に発想していった。

8 東北での展開

最初の頃、仮設住宅を訪ねるときに、被災して裁縫道具がないかもしれないし、販売している店も開いていないかもしれないと思って、裁縫道具箱を作って持っていった。大体3人に1つが当たるように配置した。すると1つの箱を前にして、右端の人が「ちょっとハサミを取ってください」と声をかけると、左端の人がはいはいと答える。そのちょっとしたことがきっかけとなって「お宅何を作ってるの」などと声掛けが生まれる。それが合図であったかのように3人の間でスムーズに会話が始まる。

もし裁縫箱を1人に1つそろえると、そんな会話が生まれにくい。最初のころの集会所運営はこうした「阪神」時代の先人の知恵が役に立つ。



被災者向けの工房に集まった女性たち(2011年12月、宮城県七ヶ浜町で)

前述のように被災者が仲間づくりや閉じこもりにならないために集会所で手芸教室などを開く。そして時間とともに手芸の腕を使って何かしてみたいと考える一阪神大震災や中越地震などの経験からきつとこういう雰囲気になるので、その時にどういった提案ができるかが大事だと自らも思い、地元で活動するNPOにも情報提供してきた。そしてそんな場面に進んでいる仮設住宅がいくつか出てきている。

そういう希望のあるところには例えば手芸キットを組み立てれば1個当たり100円の工賃を払って商



阪神、中越沖などの被災者がつくる手芸品の展覧会(2009年2月神戸市東灘区で)

品を引き取って神戸で販売する、というストーリーだ。しかしこれは壁がある。神戸で売れなければ商品がだぶつく。販路を確立しなければ長続きはしない。復興コミュニティビジネスの泣き所なのだ。そうした営業活動をだれがするの、そのコストは誰



新型風呂敷の「みやぎ敷」の試作品

が持つのかという現実的な課題があるからだ。

一方の障がい者の作業所向けの商品は専門家による企画の結果、結ばなくても資料が落ちない新型の風呂敷を第1号として宮城県内の施設で縫製作業を行っている。パッケージの案もでき、近々商品として店頭に並ぶことになる。

元被災地としての神戸・阪神地域。17年前に全国から支援、応援をいただいたその経験を私たちはどんな形であろうと返していかなければいけない。

神戸・阪神でがんばってできたことをぜひ東日本にも伝えたい。私たちの行っている手芸品などを作ってくらし復興の一助にする情報は、阪神大震災の「正史」には記載されていないであろう。しかし、数年前に私たちが聞き取り調査を行った時、多くの高齢女性が目を輝かせて往時を思い出し、「楽しかったしお金も入ってうれしかった」と話してくれたその思いを今度は東日本、東北に伝えていきたい。

汗と泥と罵声と卑弥呼・清盛・秀吉・海舟の埋蔵文化財

安田 滋(神戸市教育委員会文化財課)(33回生 昭和60年卒業 史学科日本史専攻)

茅渟海(ちぬのうみ=大阪湾)を見渡せる学窓を離れ4半世紀が過ぎ、私は今、神戸市教育委員会文化財課で神戸市内での文化財保護行政に携わっています。一口に文化財といってもその形態は様々で、神戸市内には西区の国宝太山寺本堂をはじめとする建造物、多くの観光客を集める北野異人館街の北野伝統的建造物群保存地区、兵庫県最大の前方後円墳である史跡五色塚古墳、国宝桜ヶ丘出土銅鐸等々の、国宝・重要文化財などをはじめとして、東灘のだんじり等のお祭りや灘の酒造り資料などの民俗文化財、はたまた、灘区春日神社の大クスノキ、王子動物園にいるコウノトリ、須磨海浜水族園にいるオオサンショウウオなどの天然記念物も文化財に含まれます。また最近では「阪神・淡路大震災1.17のつどい」が毎年行われる三宮の東遊園地も国の登録名勝で文化財になっています。これらを保護し、後世に伝え、残していくことが現在の私の仕事です。



ていくための一番大事なことでと考えています。私はこれまでの殆どを埋蔵文化財の発掘調査現場で過ごしてきましたが、発掘調査現場での現地説明会は、自分たちが住んでいる地域のこんな身近に古代の遺跡が眠っていることをリアルに感じてもらえる良い機会です。もし近くの発掘現場で現地説明会があればぜひ一度立ち寄ってみてください。



遺跡現地説明

最近ではそれ以外にこれまでの調査成果を活用して、より身近なものとして知っていただく仕事にも時たま携わっています。その実例が「卑弥呼・秀吉・海舟・清盛」です。地域の歴史に親近感を持ってもらうために歴史上の有名人を引っ張り出して物語ることは、取っ掛かりとして有効なツールです。今年は大河ドラマで「平清盛」が放映されていることで、特に清盛が注目されており、神戸でも清盛関連の観光に力を入れています(少々悪乗り感もありますが)。私も講演等の依頼を何度か受けましたが、その中では、単に福原京に関連する遺跡に限らず、清盛と同時代の遺跡が神戸には数多くあり、それらがまさしく清盛と同時に生きた地域の人々の姿を映し、彼らが平氏や中央政権と関わってきたことも踏まえながら解説すると、「地域にこんな歴史があったのかと初めて知った」という感想を度々聞きます。神戸と秀吉との関連では、有馬温泉との関係は有名ですが、それ以外に三木合戦などの秀吉と関連する遺跡は多く、そのような遺跡や資料の展示と関連遺跡のバス見学会を企画し、より身近に戦国時代の神戸を感じていただくように努めました。また現在、和田岬の三菱重工業神戸造船所内にある史跡和田岬砲台では80年ぶりの「平成の大修理」が進んでいます。この砲台は幕末に勝海舟の指導の下、その門弟の佐藤与之助が設計したものです。平成25年完成予定ですが工事期間中に毎年、当時の砲台や幕末の海防についての講演会を開催するとともに、修理工事現場を見学していただくことによって、文化財への関心を高めるべく苦心しています。神戸は明治の開港以降のハイカラでモダンな街としてとかく見られがちです。しかし、実はそれ以前からの悠久の歴史の流れの末に今の「コウベ」があることを広く知っていただくため、汗と泥にまみれて、罵声も浴びながらも、卑弥呼・清盛・秀吉・海舟等と語りながら、文化財を後世に伝えるべく奮闘する日々を過ごしております。

とはいっても、これら全てに携わっているのではなく、これまでその殆どを埋蔵文化財の仕事に携わっていました。「埋蔵文化財」は文化財保護法上の用語で、土地に埋蔵されている文化財のことをこう呼びます。埋蔵文化財の存在が知られている土地のことを「周知の埋蔵文化財包蔵地」と言い、これは平たく言えば遺跡のことです。この「周知の埋蔵文化財包蔵地」内で道路を造ったり、建物を建てたりする場合(地面を掘削する工事)、その工事が埋蔵文化財に影響を及ぼす時は発掘調査を行います。そして、どうしても遺跡を現地に保存できない場合は詳細な記録を留めた後に工事が行われ、これを記録保存と言います。「日本最古の…発見」などと新聞紙面を度々賑わす発掘調査の殆どは、このような開発事業に伴う発掘調査なのです。この発掘調査を行うためには、事業者時間に費用の負担をお願いしなくてはなりません。すぐに「はいそうですか」とその負担を了解してもらえることはまずありません。そりゃ誰でも、家やビルを建てるのに1円でも無駄にしたいのとは言うまでもありません。罵声を浴びせられることも度々で、そこを粘り強く国民共有の財産であることを説明し、理解してもらわなくてはならないのです。

このように、文化財保護には市民の方々の理解が不可欠なのですが、そのためには日頃から多くの人に地域の歴史や文化財を知っていただき、文化財の大切さや、それが地域のアイデンティティーであること訴え続ける必要があります。そのことが次世代に文化財を伝え、残し

あれから1年半「マスコミの責任」とは

<3.11被災地報告>

塚本京平
(岩手朝日テレビ報道制作局報道制作部)
(平成22年卒業 社会学専修)

東日本大震災から早くも1年と半年。東北も、そして岩手県内も日に日に落ち着きを取り戻し、震災の話題も私たちの会話の中から確実に減ってきています。

日々のニュースに目をやると、住居の再建や水産業の回復問題などが取り上げられ、沿岸部の完全な復興にはまだまだ多くの課題が残っていることがわかります。しかし一方でその沿岸部に向かうと、取材先の方々から私たちのほうが元気で笑顔をいただくことも多々あります。復興は人々の心の中から確実に進んできているのです。

さて、あの日から1年半の時間が経った今だからこそ、改めて考えることがあります。それは、震災直後の報道についてです。

2011年3月11日に発生した東日本大震災。私たちは当日から、ただただ必死に沿岸部を駆け回り、多くの映像を撮影し、取材した内容をニュース番組で流し続けました。中には取材を拒まれた方もたくさんいらっしゃいました。「生きるか死ぬかという状況で取材など受けてられない」「心の傷を深くするようなことはやめてほしい」。このような考えは私たちが十分に理解することができましたし、そうした方々にコメントを求めようとする取材に疑問を感じたこともありました。



地震や津波の映像使用に関しても同様です。宮古市役所から撮影した黒い津波や、大船渡市や陸前高田市の町を襲う津波の映像は、いずれも私たちの現地取材クルーが撮影したものです。震災直後は、あの日に何が起こっていたのかを全国に、そして世界に伝える貴重な資料となっていました。しかし、あの日からしばらく経つにつれ、特に岩手県内で「震災を思い出すから津波の映像は放送しないでほしい」という意見を多々いただきました。自分の家族や友人を失った原因である地震、津波をもう絶対に見たくないという心情です。これも十分に考えられることでした。取材をしてほしくないという人に取材をし、流してほしくないという映像を何度も放送する。なぜ私たちはこんなことをしているのだろう、と悩んだことは数回ではすまされません。



では、私たちは実際どうすべきだったのでしょうか。これは大きな問題です。

改めて考えると、私たちが何のためにこの仕事をしているのか、という問題に行きつきます。私たち放送局をはじめマスコミには、自分たちが怖くても、恐ろしくても、その事実を伝えなければならない責任があります。国民が知りたい、知らねばならないこの状況を誰が伝えるのでしょうか。それは私たちの役目なのです。

皆さんはあの日起こった津波の映像を覚えているでしょうか。いまだに覚えていて、「怖い」という印象や記憶を持っている方もたくさんいると思います。

それではもしも同じような揺れが来たとき、皆さんはどうするでしょう。

数々の報道を見てきた方なら、きっと同じような津波が来ると判断し、高台に逃げるのではないのでしょうか。私はそうあってほしいと思います。そして私たちの伝えてきた情報が、流してきた映像が、その動機付けのひとつであってほしいとも思います。同じような悲劇はもう絶対に繰り返してはなりません。逃げようとする人が増えれば、1人でも多くの命が救われるのです。そうしたときに、私たちの使命は果たされます。



震災に限ったことではありません。私たちがなぜ無残な事故の映像を流すのか、火事を取材するのか、事件を追いかけるのか。それは、天災も、人災も、このような恐ろしいことがもう二度と起こってほしくないという私たち自身の叫びなのです。私たちの覚悟を、魂を、少しでも感じていただければと思います。

もちろん、辛いこともたくさんあります。怒鳴られたことも、厳しい言葉をかけられることもあります。それでもそのたびに、何のためにこの仕事をしているのかを考えてきました。亡くなった方の無念、残された方の無念、そしてこの記憶を後世に伝え、同じことを繰り返さないため、私たちには取材する責任があるのです。

「リメンバー3・11」、そして「ノーモア3・11」。使命感を忘れず、これからも被災地取材にあたっていきます。

文窓会に新しく仲間入りしました!

社会人としての試練のただ中で

近石 壘(哲学専攻)



スキルのない文学部卒が数ヶ月でできるやりのある仕事などありません。何もできない自分に憤りや将来への不安を感じます。

この仕事を続けていけるのか、他に適職があるのではないかと悩みます。配属が決まると周囲に同世代の社員はいなくなりました。逃げ場のない辛さ、やるせなさ、絶えることない緊張感、それらを乗り越えることが社会人の試練だとするならば、私はまさにその試練を前にしています。

自尊心を失った自分を慰めるため周囲から認めてもらおうと必死になりました。しかし満足する結果は得られませんでした。業務において必要とされる知識、技能は自分の予想を超えるかに高度なものでした。

そんな時に上司からこのようなことを言われました。「自分の考え、思うところを言わない人間は無価値だ」「やれ」と言われれば大抵のことはできることを優秀

だとする思い上がりを正せ」と。

この言葉のおかげで私は重大な誤解に気付きました。自分に求められているのは「意思」であり、どれだけ自分に知識や技能がなくとも意思を持つ限り他の如何なる社員とも同等でいられるということです。

私の自負心の中核は高度な思考を行えることにありました。私は未だ神戸大学に入学できたことを誇りにしていました。それは能力の高さを示す保証書として自分の価値と自信の源を自他共にいつまでも担保してくれると思いついていました。

しかし本当に自負すべきは自惚れを招く担保などではなく、志を持ち一心に勉学に打ち込んだ経験であり、頭打ちの能力などではなく意志の力が持つ可能性でした。私はこのビジネスという舞台においても意志のもとに新しい誇りを勝ち得なければならぬのだと気付きました。

入社から四ヶ月が経ちました。苦悩を気の置けない悪友のように招いてしまう私が社会人らしさを身につけるのはまだまだ先のようにですが、その道程を一步の重みを感じながら進んでいこうと思っています。

(IT系企業/ITソリューション大阪事業部勤務)

未熟者、富士山へ挑む

森田 祐未(英米文学専攻)



写真左が森田さん

「あなたはなぜ登るのか?」一私が富士山に登ると知った友人はこう尋ねた。返答として、「そこに山があるからだ」とい

う登山家ジョージ・マレリーの言葉を借りるのは簡単だ。しかしそれで良いものか。登りきってから答えることにしよう。

社会人になり、慣れない環境・対人関係に、負けるものと奮闘する日々。とにかく早く就寝したい平日、心から楽しめない休日。勿論しんどいことばかりではないし、弱音や愚痴は言いたくない。そして迎えた初めての有給休暇。ビーチリゾートで開放的な気分を味わい、エステやマッサージで心も体もリフレッシュ...そのような考えも頭をよぎったが、結局日本最高峰、富士山への挑戦を選んだ。登山経験は乏しく、体力に自信もない。しかし、富士山を登りきったら自分が強くなれるのではないかと、浅はかながらそう考えた。

実際に登ってみて、富士登山は人生そのものであると感じた。重いザックを背負いながら高山病対策に常に呼吸を意識し、ゆっくりだが着実に歩を進める。上を見ると山小屋はもうすぐそこだが中々たどり着かない。もう少し、もう少し...着いた。しかしここがゴールではない。歩き続ける。友人と励まし合い、岩をよじ登る。休憩、空を見上げる。息をのむほど美しい星空が一面に広がっている。なんとこの美しさ。そしてまた歩き始める。結果、90分の仮眠をはき、8時間を経て山頂にたどり着いた。達成感に涙をにじませながら拝んだご来光は、圧巻の美しさだった。

普段漫然と生きてると、呼吸や、自分の足で一步一歩前に進むということの中々意識しない。また、仕事を始めてからまるでロボットになったかのような感情の乏しさを感じていた。しかし富士登山によって活力を取り戻し、ここまで清々しく「生きている、しんどい!」と思うことができた。

「あなたはなぜ登るのか?」という問いにはこう答えよう。「生を実感するためだ」

(損害保険会社/船舶営業部勤務)

早く一人前になって『自分にしかできない仕事』を

澤 絵美里(心理学専修)



3月に神戸大学を卒業し、社会人として働き始めて4ヶ月が経ちました。大学時代とは生活が一変しましたが、そのころとは違った意味でまた充実した毎日を送っていると、胸を張って言えることが本当に幸せだと感じています。

大学時代は研究室、部活動、アルバイトなど、好きな人たちと、好きなことを追いかけることのできる自由に溢れていました。今の生活が不自由だとは思いませんが、自分が選んで入った大学で過ごした4年間は、今までの人生で一番短く感じるほど満喫していたと、卒業してからはじめて気付くことができました。

社会に出てからの生活は、毎日決まった人と、与えられた仕事に取り組む日々の連続です。そう言ってしまうと単調な印象です。私自身、卒業するまでは会社勤めなんてつまらないものだと、勝手にイメージを抱いていました。しかし、実際に「仕事」に出会い、そのような考え方は全く違っていたことに気付きました。

(特例財団法人勤務)

新社会人になって

森下 絵理香(日本史学専修)



新社会人として、仕事を頑張ることは大切ですが、新しい環境で戸惑うこともたくさんあり、疲れることが多くなりました。そこで、元気に仕事を続けるためにも、リフレッシュが大切だと考えるようになりました。学生時代と大きく変わったことは、今までは自由な時間がたくさんあり、いつでも好きなことをで

ましたが、社会人になってからは、毎日の仕事の合間をうまく使わなければならないということです。今回は、私が実際に行っている息抜きの方法をご紹介します。

私の職種は、一日中デスクに座っているので、肩こりや頭痛に悩まされることがしばしばありました。その対策として始めたのが、バレエとヨガです。仕事帰りに1時間ほど体を動かすだけで、次の日もスッキリ過ごせるようになりました。それだけではなく、先生やレッスンの参加者

と話すことで、自分の知らない新しい情報を得ることができるとてもいいことだと感じています。

私の最大のリフレッシュ方法は旅行をすることです。もともと旅行が好きで、学生時代はよく海外にも行っていましたが、仕事を始めると、休みの期間が限られてしまいましたが、その中でうまく時間を活用して、旅行をするようになりました。今年の夏休みには、3泊5日でフランス・パリへ行ってきました。まさに「弾丸トラベラー」で、体力が必要だと感じましたが、メンタル面でとてもリフレッシュできたので、さらに仕事に取り組もうという気持ちになることができました。

社会人になって、時間の使い方がうまくなったように思います。大学時代より、自由に使える時間は減りましたが、その分短時間にいろいろなことをするので、とても密度の濃い自由時間になりました。最近では、いかに時間をうまく使うか考えることが、おもしろいと思えるようになりました。大学時代は、勉強はもちろんですが、思いっきりやりたいことを楽しんで、卒業後は新しい時間の使い方を発見してみてください。

(公務員)

Oxford・牛津・問津



文学部長の任にあった2年間で最も印象に残っていることは何かと問われれば、やはり神戸大学とオックスフォード大学との交流協定締結に指を屈するであろう。大学間協定のもとに、神戸大学文学部とオックス

フォード大学東洋学部との間にとりかわされた細則によって、東洋学部日本学専攻の学生12名を文学部に受け入れるというプログラムが、実施されることになった。

2011年3月協定の締結のために、初めてオックスフォードへ赴いた。街の中にそれほど大きくない川が幾筋か流れていて、それが地名の由来になっているようだ。fordは川の浅瀬の謂いで、Oxfordとは雄牛でも渡れるほどの流れということ。Oxfordを中国語で「牛津」と標記するのは、意味を訳したものである。ちなみにオックスフォード大学とともに双壁をなすケンブリッジ大学

中国古典文学教授 釜谷 武志

が位置する街 Cambridge も、ケム川の流れを有する。此岸・彼岸という語から想像できるように、川は二つの世界をさえぎるものであり、結ぶものでもあった。古代中国でも同様で、「津」は渡し場の意でよく用いられる。渡し場は異なる世界の境界にあつて、両者の架け橋となり、時には双方にまたがって両義性を帯びる存在でもあった。「問津」は文字通り渡し場のありかを問うことであるが、道に迷った孔子一行が隠者に渡し場をたずねた(『論語』)ことから、学問への道を聞く意味でも使われ、さらに一般に物事を追求する意味でも使われる。4世紀中国の詩人陶淵明の「桃花源記」では、桃花源を探そうとする者がいなくなったことを「津を問う者無し」と書いている。わたしは今秋「書物誕生 あたらしい古典入門」シリーズの一冊として、陶淵明についての書を上梓する予定で、川をさかのぼって桃花源という異境にたどり着くことの意味について考えている。そこでも「問津」にふれているので、ぜひ書店で手にとって見ていただきたい。

<最新刊!>書物誕生 あたらしい古典入門シリーズ
「陶淵明——〈距離〉の発見」釜谷武志(著) 岩波書店

東京支部便り

第8回文窓会東京支部総会および木曜会が下記の通り挙行された。

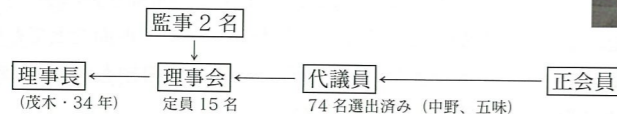
日時 平成23年(2011年)10月27日(木曜日)
14~17時 文窓会総会 / 18~20時 木曜会(文学部担当)

I 文窓会総会

(1) 神戸大学東京六甲クラブ発足について

- ① 設立 平成22年5月 東京凌霜クラブを東京六甲クラブに改称。
平成23年4月 一般社団法人神戸大学東京六甲クラブを設立。
目的: 神戸大学全学部の卒業生・教職員・学生の関東における交流の拠点となる。
活動: 5つのプロジェクトチームによる改革運動を通じて、会員増強を行い財政基盤を強化する。

② 組織



正会員: 経済経営法学 929名、工 94名、文 30名、農 30名、
教・発達 20名、理 7名、医学 8名、海事 8名、国文 1名。

文学部平成23年度正会員30名(詳細下記): 順不同敬称略:(平成24年2月末現在)

鳥越 要子(32年) 小野 幸次(32年) 竹歳 一夫(32年) 渡瀬 道子(32年) 廣瀬 祝子(32年) 高見 秀史(33年)
河野 房子(35年) 枅尾 武(専攻36年) 白藤 禮幸(36年) 橋本 静子(36年) 井上真太郎(36年) 中野 裕(36年)
五味 尚子(37年) 川島 好子(37年) 竹内 紀子(37年) 日下部俊子(37年) 松井 康子(37年) 野田 弘三(39年)
松澤 昭史(40年) 田辺久美子(42年) 羽田 暁代(42年) 稲葉 昭典(42年) 田中 勉(47年) 小野 曜子(51年)
松原 悦枝(54年) 池澤 雅弘(53年) 堀江珠喜(博士57年) 山本 正子(59年) 中川 順子(63年) 長野 純一(H2年)

平成23年4月に立てた追加目標:

経済経営法学 300人、工 200人、農 100人、理 50人、教・発達 50人、文 50人、国文 20人、医学 10人、海事 20人。

③ 会費納入状況

平成23年9月末までの平成23年度会費納付者は1,127名(昨年同期: 986名)。



文窓会 脇田晴子先生文化勲章受賞記念講演 平成23年10月27日

今年も盛況&大好評!文窓会主催 新入生歓迎ティーパーティー

さる5月16日(水曜日)の午後、平成24年度【文窓会主催】新入生歓迎ティーパーティーが文学部学舎にて開催されました。このパーティーの趣旨は、一堂に会することの少ない新入生が集い、互いに親睦を深める。さらには、新入生たちが専門の先生方と懇話の機会を持ち、自己に適した専修選択を考える機会を持つ、というものです。

このパーティーも今年で3回目を迎え、先生方も要領を得た様子で臨んでおられました。また、新入生たちが一言一句漏らさぬ真剣な態度で先生方のお話に聞き入っていたことも、ここにご報告申し上げます。(坂本)



和やかな雰囲気の中で、新入生の質問に先生や先輩が親身にアドバイス。軽食やお菓子、お茶のある、このひとときは文窓会からのプレゼントです。

④ 行事などの活動状況

- 講演会: 特別火曜会(毎月第三火曜日・昼、2月・8月は除く)、木曜会(毎月第四木曜日・夜、1・5・8・12月は除く)ミドル会(年1~2回・夜 不定期)
- 交歓会: 新年互礼会(1月)、ビアパーティー(7月)、新卒者歓迎会(9月)、忘年会(12月)
- その他会合: 若手の会(隔月)、ゴルフ会(年4回)、音楽会、映画鑑賞会

⑤ 総会出席者(敬称略順不同)

脇田 晴子(31年) 鳥越 要子(31年) 竹歳 一夫(32年) 小野 幸次(32年) 高見 秀史(33年) 笹井 明彦(34年)
河野 房子(35年) 西原 重夫(35年) 枅尾 武(専36年) 橋本 静子(36年) 白藤 禮幸(36年) 五味 尚子(37年)
日下部俊子(37年) 松澤 昭史(40年) 田中 勉(47年) 中野 裕(36年) 16名

(2) 今後の東京支部の文窓会の運営について(役員改正)

- 東京支部文窓会総会開催日について: 年に一度の開催を原則とする。文学部担当の木曜会にあわせて、従来通り開催する。
- 役員改正:
副会長の松澤明史氏(40年)が辞任し、あらたに田中勉氏(47年)が副会長就任した。
会長: 中野裕氏(36年) および副会長: 五味尚子氏(37年)は留任。

II 木曜会(文学部担当)

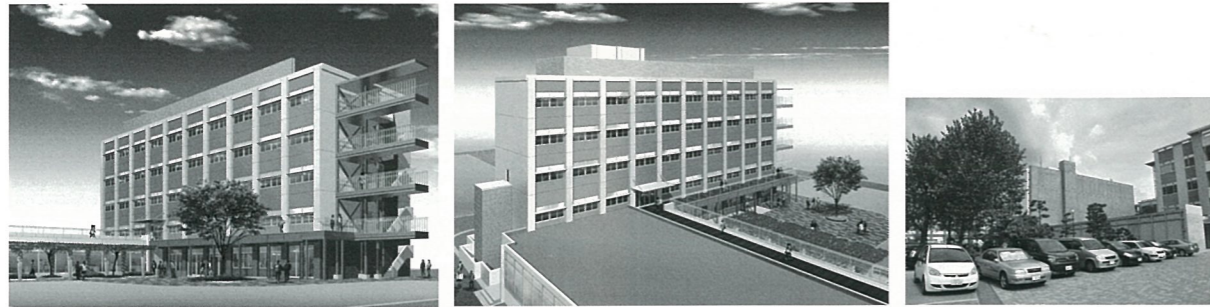
- 木曜会には、2010年度文化勲章受賞者・脇田晴子様(31年卒)による記念講演会を開いた。講演内容は「日本の中世の女性」であり、講演後参加者による懇親Partyを挙行政した。
- この講演に参加された他学部のOBからは、脇田晴子様は文学部の誇りと絶賛された。
- 木曜会参加者は、文学部16名、経営学部7名、経済学部5名、法学部2名、理学部1名 合計31名であった。
- 文学部の木曜会参加者:(敬称略順不同)
八代恵子(30年) 鳥越要子(31年) 竹歳一夫(32年) 小野幸次(32年) 高見秀史(33年) 今泉伊都子(33年)
笹井明彦(34年) 河野房子(35年) 西原重夫(35年) 橋本静子(36年) 白藤禮幸(36年) 五味尚子(37年)
日下部俊子(37年) 松澤昭史(40年) 田中 勉(47年) 中野 裕(36年) 16名

<予告>

次期文学部担当の木曜会は平成24年9月27日(木)となるので、この日に次期総会を開催する予定。次期木曜会は、高橋昌明文学部名誉教授をお招きして「平家物語関連の講演」をお願いすることにした。

総合研究棟がリニューアル!

人文科学図書館の1階部分南側閲覧室が、学生が共に学び考えるフレキシブルな学習環境「ラーニング・commons」として整備されます。また、日本文化資料室の閲覧スペースが拡張され、人文科学図書館とのアクセスもスムーズになって、今秋より受け入れるオックスフォード大学をはじめ、今後の海外からの留学生・研究生が学びやすく、日本人の学生・教員とも交流しやすい空間へと変わります。(今秋完了予定)



文窓会(文学部同窓会) — 会計報告 —

平成23年度収支計算書

(平成23年7月1日～24年6月30日)

収入総額	8,114,951	(当期収入 4,598,875)
支出総額	4,084,649	(当期支出 4,084,649)
差引	4,030,302	(当期差引 514,226)

24年度予算書

(24.7.1～25.6.30)

収入	8,440,302
支出	8,440,302
	0

平成23年度財産目録

(平成24年6月30日現在)

科目	金額
I 資産の部	
(1) 通常会計流動資産	
現金	64,107
(中央三井信託銀行) 普通預金	20,659
(みなと銀行) 普通預金	417,349
(臨浜郵便局) 普通貯金	948,627
郵便振替	2,579,560
	4,030,302
(2) 特別積立金	
(みなと銀行) 定期預金	8,051,228
(みなと銀行) "	1,005,772
(みなと銀行) "	1,508,665
(郵便局) 定期郵便貯金	8,210,000
	18,775,665
II 負債の部	
(1) 流動・固定負債	0
III 正味財産合計	22,805,967

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、適正であることを認めます。

平成24年9月12日

会計監査 鞍井修一 印

会計監査 西川京子 印

収入の部	予算額	決算額	差異	24年度予算額
会費納入金	3,750,000	3,810,000	60,000	3,750,000
協力金	600,000	715,000	115,000	600,000
利息金	10,000	11,875	1,875	10,000
總會等会費	50,000	62,000	12,000	50,000
前年度繰越金	3,516,076	3,516,076	0	4,030,302
積立金取崩金	0	0	0	0
収入合計額	7,926,076	8,114,951	188,875	8,440,302

支出の部	予算額	決算額	差異	24年度予算額
会議費	150,000	94,100	△ 55,900	150,000
事務印刷費	50,000	1,170	△ 48,830	50,000
通信交通費	150,000	80,370	△ 69,630	150,000
交際接待費	250,000	280,860	30,860	250,000
協力金費	1,000,000	894,015	△ 105,985	1,000,000
(学友会費)	(200,000)	(110,000)	(△ 90,000)	(200,000)
(活動援助費)	(300,000)	(284,015)	(△ 15,985)	(300,000)
(学術助成費)	(500,000)	(500,000)	(0)	(500,000)
会報費	1,500,000	1,469,142	△ 30,858	1,600,000
歡送迎会費	700,000	545,200	△ 154,800	700,000
(卒業生対象)	(550,000)	(425,200)	(△124,800)	(550,000)
(入会生対象)	(150,000)	(120,000)	(△ 30,000)	(150,000)
總會幹事会費	350,000	350,000	0	350,000
事業活動費	450,000	192,738	△ 257,262	450,000
慶弔費	100,000	60,000	△ 40,000	100,000
雑費	60,000	111,990	51,990	60,000
積立金	500,000	5,064	△ 494,936	10,000
予備費	2,666,076	0	△ 2,666,076	3,570,302
支出合計額	7,926,076	4,084,649	△ 3,841,427	8,440,302

気ままに本を開いたり

まぶしい空・街・海を眺めたり

友と語り合ったり



あなたも、ときどきは

心の、木陰のベンチに腰掛けて

あの頃に戻ってみませんか。

神戸大学 文学部ホームカミングデイ2012 10月27日(土)午後

Q ホームカミングデイは文学部だけでも参加できますか?

A もちろんです! 土曜日の午後1時から受け付け開始。

懇親会のお申し込みも当日でOK。ぜひ誘い合わせて六甲台へ! (詳細はうら表紙をご覧ください)

神戸大学学友会のご案内

神戸大学学友会は各学部同窓会の相互交流と大学の発展に寄与するため、同窓会の連合体として組織され、各学部同窓会から選出された人々による幹事会で運営されています。具体的な活動としては、幹事会や大学役員との懇談会のほか、大学広報誌(KOBEuniversitySTYLE)編集委員会、神戸大学クラブ(KUC)運営委員会、データベース委員会などです。現在、学友会を構成している同窓会は下記のとおりです。学友会会長は高崎正弘(凌霜会)会長、相談役は前会長の新野幸次郎氏、事務局は神戸大学企画部社会連携課となっています。

神戸大学学友会を構成している同窓会

- 文窓会(文学部)
- 紫陽会(教育学部・発達科学部)
- 社団法人 凌霜会(経済学部・経営学部・法学部・国際協力研究科)
- くさの会(理学部)
- 社団法人 神緑会(医学部医学科)
- 就進会(医学部保健学科)
- 社団法人 神戸大学工学振興会KTC(工学部)
- 六篠会(農学部)
- 翔鶴会(国際文化学部)
- 海神会(海事科学部)

「神戸大学クラブ」(K・U・C)に入会しませんか

神戸大学卒業生が学部の壁を越えて、交流をはかり親睦を深める集いがK・U・Cです。神戸、大阪、東京でそれぞれ別々にいろいろな活動を展開しています。神戸K・U・Cは元町の牡丹園に事務所を開き、講演会、読書会、ゴルフ、旅行など、楽しい催しを実施しています。

ご入会ご希望の方は **TEL 078-334-1323** までご連絡ください。詳しいパンフレットをお送り致します。

(K・U・C運営委員 日高 健一)

NEWS いよいよ2012年秋季学期より、オックスフォード大学東洋学部との共同による「神戸・オックスフォード日本学プログラム」がスタートします。同学部日本学専攻の学生12人が文学部へ! 今後は毎年学生を受け入れる予定とのこと。新しい大きな変化が起こりそうです。ご期待ください。

文窓会ホームページをご利用ください!

卒業生や大学関係者のみなさんの交流の場です。イベント告知や卒業後の近況報告、創作作品の発表、さらには自分のブログやホームページの紹介など、いろいろな形で利用が可能です。利用を希望される方は下記メールアドレスまでご連絡をお願いいたします。

kobeuniv.sakamoto@gmail.com (担当:坂本/文窓Web担当、社会学32回生)

編集後記

今号は巻頭特集として、ボランティア活動で東日本震災の生活支援をされている昭和39年卒業の山口一史さん(ひょうご・まち・くらし研究所)にご寄稿いただいた。また、11ページには、平成22年卒業後、岩手朝日テレビ報道制作部で報道記者として日々、被災者と向き合う塚本京平さんに、1年半を経過した被災地の状況を発信していただいた。世代もきっかけも異なって現地で活動されるお二人の目と体験から、テレビや新聞ではわからない被災地で暮らす人の意識や思いが、リアル且つ立体感を伴って伝わるのではないのでしょうか。今号にご寄稿いただいた皆様に感謝申し上げます。

(たなかむつこ)

文学部国文学教授 福長 進先生にご依頼しました。

表紙の題字は、<http://www.kobe-u.biz/bunsokai/> (検索→文窓会)

文窓会役員 (平成24年9月末現在)

会長 池上淑子 (43年卒・社会学)

<その他の役員>

日高健一 (36年卒・芸術学) 武藤美也子 (43年卒・国文学) 田中睦子 (46年卒・芸術学) 廣野幸夫 (43年卒・社会学)
花木直彦 (36年卒・国史学) 吉田浩次 (43年卒・社会学) 坂本直樹 (59年卒・社会学) 宮崎典久 (63年卒・社会学)
田中賢司 (42年卒・社会学) 西川京子 (44年卒・西洋史学) 鞍井修一 (36年卒・国文学) 安部栄治 (36年卒・社会学)